

## 『トクヴィルの憂鬱 フランス・ロマン主義と〈世代〉の誕生』

高山裕二 著 白水社 2,730円(税込)

### 憂鬱は、さらなる改革の原動力

会員 菅 芳郎 (45期)



本書は、トクヴィルの政治思想の古典的名著である『アメリカのデモクラシー』の解説書ではない。

本書には、フランス革命後の開放感と将来に対する大きな期待感を抱いた世代が、やがて大衆に埋没して、期待感の大きさに反して何ほどの成果も上げられない現実に深い無力感を感じる状況が、若手政治家トクヴィルを中心として活写されている。特に、トクヴィル自身が、ノルマンディ地方の古い貴族の末裔でありながら、フランス革命後の新たな可能性を模索する世代であったことが、より憂鬱を深めたのかもしれない。

本書は、「なぜトクヴィルは、アメリカの民主主義をあのように礼賛したのだろう」という疑問にも答えてくれるが、トクヴィルの生き様を通じて、近代フランスが壮大なる政治的実験場であったことを改めて思い起こさせてくれる。それは、また、ユゴーの『レ・ミゼラブル』やディケンズの『二都物語』の舞台であり、夭折した天才数学者ガロアが革命に翻弄され生き急ぎ、語学の天才シャンポリオンが革命と反動の嵐の中で大学を追われながらも「ロゼッタストーン」を解読した時代でもあったことも思い出される。さらに、円形競技場に詰めかけたローマ市民が、辺境から凱旋した將軍を熱狂的な歓喜の声援で新皇帝に選んだように、かつての受験生から熱い支持を受けた樋口陽一先生の「比較憲法」がその研究対象とした時代であったことも、懐かしく思い出されるであろう。

ただし、本書においてトクヴィルは、自身も依拠する「比較」という手法については、「物事を明晰に観察できない人間精神の奇妙な弱さ（であり）、…浮動する視座

を一時的に固定する手法（でしかない）」と批判する。しかしながら、対象同士を直接比較する手法にはこのような弱さがあるかもしれないが、対象が一定の基準（この基準を確立できるかが問題なのだが）からそれぞれどのようにずれているかという差異を比較する手法によるなら、「対象の性質」と「基準からの逸脱」が有機的に関連していることを示しうる点で、優れた手法となりうるであろう（デリダも「意味とは差異である」と言う）。

ところで、トクヴィルは、『デモクラシー』の国アメリカにあれほどまでに賛辞を惜しまないのに、「アメリカ文明」そのもの（というか、「近代文明的なもの」に対してか）は嫌悪している。そして、旅行中に滞在したサギノーに残されていた手つかずの自然を「文明化の止まる境界」と賞賛しつつ、やがてそこも開拓の波で破壊されるであろうと陰鬱な未来を予見している。「昔はサギノーからミシガンまで何日もかかったけど、今はすごく便利になった」というような一節がサイモンとガーファンクルの「アメリカ」の中にあることから、その予見は正しかったことになる。

本書では、トクヴィルは、内部に抱える新旧の価値の対立を止揚する高次の機軸を見い出せないままにしている弱さや、「欲望の大きさとその実現を支える手段の小ささ」から深い無力感を感じたものとされているが、これは、かつてのホップズの指摘そのものでもあった。

ポストモダンを生きる我々にとっても同じような無力感や憂鬱にさいなまれる日々なのであろうか。しかしおそらくは、そのような気分こそ「2階に登るために梯子」に足をかける力の源泉なのかもしれない。